

(様式)

令和3年度 学校評価 学校関係者評価書

学校園名	三木市立三樹幼稚園
------	-----------

1 学校教育目標

○健康でがんばる子(・強い体と豊かな心をもつ子・何事にも最後まで頑張る子) ○遊びを考え出す子(・自分から進んで遊ぶ子・友だちと一緒に工夫して遊ぶ子)

○助け合う子(・友だちの気持ちがわかる子・友だちと力を合わせる子)

2 本年度の重点目標

- ・幼児理解を深める中で一人一人の学びと、クラス集団としての保育の学びを見極める(教師の支援の方向性と学びあるクラス集団保育を目指して)
- ・身近な自然とかかわり、友だちと共に感動したり、気持ちを伝え合ったりしながら豊かな感性と想像力が育つ保育をすすめる。
- ・幼児教育の目には見えない内面の育ちの重要性を考え、その中でも幼児が主体的に学ぶ姿と就学以降の学びの姿の接点を意識化する。

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
教育課程・指導	○「キラリポイントシート」を作成するにあたり、子どもの成長の節目を見極めたり、成長に至るまでの支援の方向性を教師間で見極めたり共有したりすることで捉えにくい内面の学びを考えることで教師の研鑽を積むこととなった。また「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」も意識づける機会とした。 ○今年もプールへ行かず、園庭での水遊びだったので、様々な活動が楽しめるように環境設定の工夫をしたり、子どもが“これが好き”という興味を見極めて活動のテーマにすることで熱中して取り組むことが出来た。 ○一人一人の思いが自己発揮出来るように、環境設定したり遊びの場を広げたりすること、クラス皆や園全体での学びとなる保育をそれぞれに意識した。	B	○「キラリポイントシート」は保護者と子どもの成長を共有することが第一目的ではあるが、教師間で一人一人の子どもの変容と学びを読み取り、さらに確かな支援に繋げていくスキルとなっている。しかし、日々の保育の中ではそれらを記録し表す時間が持ちにくいので、長期休暇の間に研修時間を確保し、継続実行していきたい。 ○教科学習とは異なる就学前教育特有の“環境による教育”を戸外の遊びでも室内の遊びでも豊かに展開していけるようにねらいの持ち方や支援の仕方、活動の展開方法などを教師間で交流し研修を重ねる。
道徳・人権教育	○子ども達は自然や身近な生き物にふれることで、さり気なく命を感じる。秋に沢山パッタと触れて遊んだ時、テラスの真真中に居たパッタの体の向きを変えてやり「君、あっちだよ」と声をかけていた。草を引き根っこについていた沢山の土を根気よく取り除きうさぎにあげる姿。そのような姿に共感することを大事にしてきた。 ○お互いを思いやるには、お互いのことを分かり合うことが必要で「○○さんは今こんな気持ちで言った(行動した)のか？」と想像することが出来る機会を保育の中で確保してきた。幼児には切ったり書いたりなど何も技術を要しない身振り表現遊びが最適な場で、今年も継続的に保育に取り入れた。	B	○数十年前の子ども達なら、ゆとりある時間や遊び場の中で、自然に経験していたことが出来なくなっている面がある。よって保育現場において意図的に機会を作っていくかなければならない。 ○多くの経験を積んでも、日々教師自身が人権の感覚を磨いていかねばならない。自然や命と出合いながら何を大事に立ち止まりたいのかを教師間で感覚の交流を重ねていきたい。 ○幼児期に最適な“身振り表現”の保育内容は、そのねらいの持ち方や保育のスキルが大変難しいが是非とも継承していきたい。
特別支援教育	○すべての子ども達の幼児理解をする中で、一人一人の良さや課題を個性として捉え教師が寄り添うことで子ども達にもクラスや園全体として、その雰囲気が出てきていると思う。 ○それぞれの子の困り感が表われるのは、場面や時期によって異なっている。その場その時の状況を見極め支援の方向性を教師間で伝達・共有してきた。例えば、2学期になっても自分の気持ちや考えを表出しにくい子には、その子や周りの子が良く知っているテーマを環境に組み込み機会を持てるようにした。 ○保育に関しても保護者の悩みに関してもタイムリーに専門機関と繋げてきた。	B	○近年、特別支援教育はインクルーシブ教育として、支援が必要な子どももクラス皆で受容し合って、互いの良さを認め合えるように支援することが定着している。必要な支援を“個性”として捉えるがその支援の方向性を見極め、支援し、振り返り、新たに方向付けの一連の流れは教師総動員で考えていかなければならない。その子にとってどのような支援が相応しかったのか、変容した節目やきっかけは何であったのかを継続して考えながら保育していきたい。 ○専門機関との繋がりは必須で有りタイムリーに機会をもつ。
家庭・小学校との連携	○ホームページやクラスだより、ドキュメンテーションなどにより、保育と子どもの様子や幼児期ならではの学びの大切さを感じ取っていただけるようにする。 ○「キラリポイントシート」により子どもの個性や育ちを共有し、繋がりを確かにする。 ○好機を見極めて交流し就学以降の学びも見据えながら幼児教育との接点を見極める。	A	○今年度も、緊急事態宣言やまん延防止法が出ていない間に出来る限り行事をもったり、保護者に降園時間10分前に来ていただき少しでも子ども達の様子を見て頂いたりして、最大限の努力はしてきた。来年度もさらに続くようなら、普段の様子の動画を撮り、少人数ずつの方に見ていただく機会も視野に入れていきたいと考えている。 ○「キラリポイントシート」のさらなる保護者との共有を目指すとするれば保護者より、子育てをする中で子ども達への思いを表現出来るような機会にしていけたらと考える。(保護者に負担が無い範囲で) ○このコロナ禍、スポーツフェスティバル、音楽会、5年生との交流など貴重な交流の中、多くの学びがあったので可能な限り続けたい。
健康・安全教育 防災教育	○毎月行う避難訓練の中で、幼児なりにその都度、一つしかない命を守る意識の重要性を感じ取っていけるように伝える。 ○まだ続くコロナ禍において感染対策を継続すると共に基本的な幼児の心身の育成を目指す。 ○幼児の遊びや生活の中で常に危険を察知し防止していける意識を職員間で保つ。	B	○今年度は新たに洪水時の避難確保計画を立て避難所である三木コミュニティセンターまでの避難を想定して行ったが、避難所までの道のりや洪水時の状況を幼児なりにイメージし意識を高めていけるようにしたい。 ○ゲームが流行する中、戸外遊びを中心に、かつ仲間と自治的に遊べるようにするには、極めて意図的にかつタイムリーに誘導しなければならぬ。難しい支援ではあるが健康な心と体を目指すには大事な保育環境であるので、継続していきたい。 ○園児の様子をよく見て安全な環境を再構成する感覚が大事である。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

改善の様子が伺え、園の取り組み姿勢が伺える。B評価は全体的に控えめだが、一つ一つの物事に改善の方策が出されており、次年度への期待が持てる。評価方法と内容は適切である。コロナ禍での教育で「もっとできるのでは?」「もっとできたのでは?」の葛藤が、やや控えめの評価になったのではないかと推察する。コロナ禍を理由には出来ないということは勿論、論外だが、創意工夫をもって頑張ってきたことには自信をもって良いと考える。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>評価Bは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「キラリポイントシート」を昨年度から継続し、明確な目標をもって取り組まれている。本年度の重点目標達成のための実践と教師の研鑽に生かされ、教師間での子どもの成長過程共有に大きく貢献している。今後さらに、教師間のタイムリーな情報共有を行う視点を大事にししながら、この取り組みを是非続けていけると良い。 ・自由に遊んで考えさせたり、意図的に環境設定をしたりして、「子どもは遊びの中で学ぶ」という基本的な姿勢が教育課程と指導に見られる。それと共に、みんなで何かをするという協同性を一層大事にしていくと良いと感じた。
<p>評価Bは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児にとって「身近な自然や生き物に命を感じることを重要な事とらえて、その場面をうまく設定したり、意図的に作り出したりして、子どもたちが普段の生活の中で「命」を感じるよう実践している。昔は自然に身についた感覚を今も、未来も意識していかなければならない課題だと思う。今後も豊かな自然環境の中で経験や友だちとの共同作業などを通して命の大切さや、他人への思いやりの心を育てて欲しい。 ・お互いの感情や考えを分かり合う場面の設定のため、「身振り表現遊び」を取り入れて、子ども達の様子をきちんと記録し成果をあげている。ごっこ遊び～興味を共にしつつ仲間関係の広がりや深まり～相手のことを思いやる気持ちが育つ。心の育ちはスピードが違うので、こうして距離を縮めていくことが分かる。
<p>評価Bは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳、人権教育と特別支援の項目は相互の関係が深い。支援の必要な子どもや、仲間と馴染むのに時間がかかる子どもについては、周りの子ども達とのかかわりをより深くするように配慮し、意図的に環境設定をおこなって効果をあげている。 ・子ども達一人一人への対応は難しいところもある中で、生活発表会を参観した際にそれぞれの子を尊重できていたように思った。 ・一人一人の子どもの成長を大事にし、今後、園や保護者と関係機関との連携、小学校との連携が必要と考えられるので強化して欲しい。
<p>評価Aは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の現状では保護者に参観していただく時間が制約されたが、園だより、行事だより、ホームページなどで多くの写真と教師の説明などを提示し、保育内容を保護者に理解してもらい、意見や感想をいただき連携を図っている。 ・保護者として絵本読み聞かせも感染防止対策をしながら実行できたことは嬉しかった。 ・「キラリポイントシート」の活用によって、子どもの成長を保護者と教師が共有でき、今後の支援の方向性を決める指針となっている。「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」についてもここで周知され、よく機能している。この取り組みは、教師にとってはかなりの労力があることであるが、保護者にとって園への信頼度を向上させる取り組みとなるので頑張っていて欲しい。
<p>評価Bは適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎月避難訓練を実施していることは評価に値する。また、地域の実情に合わせて内容を選択して実施し、子ども達の意識を高めている。防災意識の観点から素晴らしい取り組みであると評価する。 ・意図的に外で自由に遊ぶ環境をつくって、自然と体力をつけたり、体験値を向上させたりすることは必要であり、それとともに自分と仲間の身を守るといった意識を付けさせている。このような積極的に戸外で遊ぶ時間を確保し続けて欲しい。 ・コロナ対策が子どもに定着するのは喜ばしく、またその他の危険を回避する体力、判断力を子ども自身で備える事が大切であり注意深く見守っている事が分かった。

